

# 神の言語と人の行爲

勝 谷 透

## 一

なべての神話は自然の、歴史の、乃至祭儀の説明と看做されてゐるのが取られつゝある研究方法に共通する傾向の様に見受けられる。私は別に之等に反對するものではないが、説明が人が神の行爲を説明したものとして古代生活に登場する以前に、神が人の行爲を保證した一面の役割を神話から看取り得られるのではないかと一先づ考を整へようとした。思惟と行動との分化に到らざる古代人が、事の然る所以の充足理由を與へることだけで生活の全面が滿され得たか否かは可なりの疑問でなければならず、また或はさう見ることによつて古代人の行爲を骨抜きにする場合もなしとはしない。創生神話にしばしば見える神々の言語及役割も説明されるが爲に存在するそれらではない。

## 二

われわれは、まづ人間の經驗以前に存在する言語についてそのさながらなる把握を心掛けよう。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これ

に由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし」とヨハネ傳福音書の説くところについては、すでに何人もよく知るであらうが、かゝる太初的實在であるところの言語については太平洋ポリネシアに於ても見得られる。ダイクソン氏によれば、凡そポリネシアの創生神話には二つの形式があつて、The Genealogical or Evolutionary Type と The Creative Type とに分ち得、<sup>①</sup>その前者に屬するものでマークサス島に存するものに、最初の混沌 Po. の中に 'Tanaoa (Darkness)' と Mutuhei (Silence) とがあつた。時がたつにつれて Tanaoa から Atea (Light) が進化し、次に Atea から Ono (Sound) が出て Mutuhei を破つたと云ふのがある。<sup>②</sup>こんでは特に Ono の出現を注意しなければならぬ。同型に屬するニュージーランドの神話に無邊際的光なき混沌の中にあつた Io. が遂に口を切つて「暗よ光をはらめ」と言つたところ直ちに光が出現したと。<sup>③</sup>或はまたメラネシアのアドミラルティアイランズでは、廣漠たる海の中を大蛇が泳いでゐた。休息すべき場所もないので暗礁よ出現せよ！と呼ぶと暗礁が大洋の中からあらはれて陸地となつたといふのがある。<sup>④</sup>ウイトト、インディアンにあつては「最初に言葉が父に原始を與へた」<sup>⑤</sup>のであり、何れも太初に實存するところの言語についての傳承である。古事記、日本書紀の傳承する日本神話の創造説の初半部はポリネシアに於けるダイクソン氏の所謂進化型に類似して自然發生的な系圖を以て進化するが、伊邪那岐、伊邪那美二神の國造りは「ことよざし」によることが認められる。國土の存在に先立つて存する太初的<sup>⑥</sup>言語<sup>⑦</sup>によつ

てゐるものなることを特に注意する必要がある。かゝる意味の言語は經驗に先立つて既に存在したもので、世界萬象はその在るやすでに此の言語を擔つてをるのである。すでに存在したものは即ち根源的な過去性をそれ自體に持ったものと言はれ得るであらう。これ神言の第一の性格である。従つて神話に於ける「言語」はそれ自身對象化されて説明となる以前に、かゝる對立に先立つてすでに存在し宇宙の存在に先行して而も宇宙に語り且つ存在を形成せしめるものとして、それ自身によつて存立する實體的存在であつた。この言語が語られ傳達される時、言語發現以前の混沌の世界は「言」によつて指される對象「事」を混沌の世界から浮び上らせることが可能であるが故に世界の中への「言語」の侵入は同時にものの存在の仕方を決定することでもある。言語が存在を決定するのであつて存在は言語なくしては存在であり得なかつた。であるから日本語「コト」は事を指す言を先立てゝゐると云へる。言語は事物を呼ぶための記號の如きものではなくして事物の在るといふことはそれ以前にすでに實存する言語の決定をまたねばならぬ。即ち言はれた言が實在する事として存在する。言葉にはものの客觀的存在を荷擔する不思議な方があるとなす我が言靈思想はかゝる構造に立つて居るのでなければならぬが、同時にか様な言語を司るものの古代社會に於ける位置が如何に重大なものであつたかもうけがはれる。出雲の大國主が自己の發言よりも八重事代主のそれに従ひ且つ事代主が神々の御尾前となつて仕へまつるならば違ふ神はあらじとなすのは(古事記)、此の神の司る言語の出雲に於ける優越性を

示すものである。或はまた葛城山の一言主の傳承を思ひ合はして見るがよい。言動はすべて天皇の如く遂に「吾者雖惡事而一言。雖善事而一言。言離之神。葛城之一言主之大神者也」と名告り、事物への決定力の大きい一言を司る此の神の威力が遂に捧物を受けるに至つた(古事記)。そしてコトシロヌシ、ヒトコトヌシといふ如く主體としての言語を名に負へる神の生活への威力を思ふ可きである。かくして不定なものを定形にまとめ上げ混沌を創造へと導くところの、根源的な過去性を擔ふところの太初的言語は古代生活の主體であつて、此等の言語の客體として己をとらへてゐたのである。であるからかゝる神言は單にすぎしいにしへに在りしものとしてだけの過去性を擔つて居るのでないことはすでに明白である。マリノウスキー氏が神話は(トロブリアンド諸島ではリリウ)祭儀や社會上及道德上の規定がその正當性を要求する場合それ等の古さと眞實さと神聖さとを保證する役をつとめる。それはまた社會的に重要な機能を有し今日の生活に尙生きてゐる原初的實在者に關する陳述であつて、前例として正當なる裁斷を下すものであり道德的價値、社會的命令、咒術的信仰の回顧的な規範を示すものであると實證したのは、神話が生活に占める主體的な位置を考察したもので前述の言語の過去性と聯關する立言で尊敬に値する。氏の取つた方法に對し史料の範圍の狭少をその缺點と爲し得ることがありとしても依然として神話の有する機能の一面にかゝる場合の存することはさほど珍しくはない。神話が根源的な過去性を有することの例證はわが國に於ても見得られる。祝詞に神話的敘述のあ

るものは災禍を加へようとする神々に對してのみ限られ、皇祖神として加護を垂れ給ふ神に對してその叙述を缺くのは崇神に對抗して發せられる神話の保證性を物語るに十分ではなからうか。わざわざ高天原の萬神會議以來のこと等の叙述をするのも根據のないことではない。延喜式には「語部美濃八人丹波二人丹後二人但馬七人因幡三人出雲四人淡路二人（略）伴宿禰一人佐宿禰一人各引語部十五人（略）入東西掖門就位奏古詞」〔大嘗祭〕とあるが古詞が祭儀道德等に必然的につながる現在の生活への指導の形を殘存するのである。播磨國賀毛郡河内里の田には草を敷かずして苗子を下すといふ一つの事實がある。その然る所以を風土記は住吉大神の從神等人の刈り置ける草を解き散らしてその坐とした。時に草主大いに患ひて大神に訴へたところ大神の曰く、「判云汝田苗者必雖不敷草、如敷草生」と記述してゐる。これすなはち現實生活の誤りなきことをかゝる神言に求め、而して此の物語りとの關涉によりて他と異なる生活も滿されてゐるのである。

人はしばしば過去なくしては暮らされないと言ふ。而してその過去をこそ究めるのが歴史なりとして神話をもかゝる過去として取扱はうとするならばその言を肯定するわけには行かぬ。神話世界が現實世界に對する保證の位置に立つてをるのであるならば、それは完成された過去でなければならぬ。古代人は完全なる過去の保證の下に生活したところ言はれねばならない。こゝに神言の第二の性格として完全性、第三のそれとして保證性をあげることが可能である。過去性、完全性、保證性、この三

者を性格とする神言及それにつながるを有つ神話は従つて現實界に生きてゐるのである。そこで、若し萬一國土の平安が危くなる様な場合には何よりも先づ神話界との連帶を取り戻すことを外にして安定をはかる何等の方法もない筈である。レヴィ・ブリュール氏は原始心性の研究の中で、低度文化民にとつては空間表象は時間表象と同じくそれについて明白なものを持つ限りそれはとりわけ定性的 (qualitative) である。各々の地區はそこを占める諸々の事物と分離され得ない複雑な全體として直觀され、神話的動物やそこに生長する植物等と關涉する (participar) と述べてゐるのであるが、かゝる思考の様式は神話を國土との連帶感の上に構成せしめることとなり、やがては神話との連帶を恢復する必要を感じるが如き國土の危機に於て神話の有つ機能の一面が有力に働き得る場合も生ずることが氏の所論に於ても同時に妥當とされ得るであらう。

而して神話界との連帶を恢復する行爲は我が國に於ては祝詞をのることである。

### 三

わが國に於て祝詞をノルといふことは生活の主體としての神の言語を地上に引きおろす人の勝れた行爲である。すべてノルとはものの表はれること或は表現を取る爲状態の移行することを總稱する。

「吾こそは告らし家をも名をも」の如きノルは萬葉集に多く見えるが、ノルことによつて今迄かくれてゐたものが隠れなき状態となるのである。占に表はれることを占にノルとも云ふ。(萬葉集卷十二) 神の

名をのることも同様である。ところが古代日本人は神に<sup>⑥</sup>祈つたのでなく神を<sup>⑦</sup>祈つたのである。

天地の神を祈りて幸矢貫き。

あめつしのいづれの神を祈らばか。

霰降り鹿島の神を祈りつゝ。(萬葉集卷二十)

の用例の示す如く動詞いのるの承ける神の語格は神に<sup>⑥</sup>でなく神を<sup>⑦</sup>である。(武田祐古氏、神と神を祭る者との文學二八四頁) 占にのるといふ時には占に何かを表現することであるが、名をのるとか神をいのるとかの如き場合には直接その全存在をあらはすことであつて神に何かを祈つたのではない。であるから神をのるとは神の顯在を促すことである。神あらはれ給ふて神の言の發動をまつのである。ノリトは此の意味に於て神を祈る勝れた行爲である。

祝詞の表現上先づ「辭代主と御名は申して」とか、「豊磐間門命と御名は申して」とか神の御名をのることが多く見えるが、神の御名をのることが何であるかと言へば神の本質をあらははさんが爲に外ならぬ。神の本質的な力の出現を待つのである。名は單なる一つの外的指標でなく、また語や音の組合せでなくて、存在のあるもの本質的なものであるとは<sup>⑧</sup>デュルクム氏がトーテム信念の構造について述べた言葉であるが、たゞに此の事のみに限られてゐない。

たらちねの母が召す名を申さめど路行く人を誰と知りてか (萬葉集卷十二)

かしこみと告らずありしをみ越路のためけに立ちて妹が名告りつ (萬葉集卷十五)

と名を告ることの禁忌が見える。名告ることは自己全體を制せられる端緒を開くが故である。又フレージャー氏のあげた例證の中から引用するならばエスキモーのあるものは老年になるや新に充實した生命力を得たいが爲に名前を易へ、オーストラリヤ土人にはそれに呪がかけられるのを恐れて名告りを嫌忌する。たまたま告げるにしても入闔者にして親密なものに限られる。古代エジプト、印度の習俗に本名假名の二つを使ひわたるのがある。假名に如何なるマデックがかけられるとも自己全體を左右し得ない。アフリカの上コンゴ地方の魚獵者は河の精靈に名を知られない様にまるで意味のない呼び方を以てする者もある。現代でさへ痕跡的なものとして姓名判断や易名の事實が多く遺存するが之等は名と名を持つ全體との必然的關係を基底とせずしては理解困難である。名が物に附けられた單なる記號に非ずして眞實の部分として全體に代り得るものであるとしたからである。『Pars pro toto』即ち「全體の代りに部分」といふ呪術神話的な原則によつて部分は全體を代表するのみならず實際部分が全本質であつたのである。<sup>⑩</sup>

祝詞で神名をのることは實在する神の全本質、全存在の顯現を促さんとする原始的思考の系列から出たものと考へて差支ない。

次の表現上の特色は列舉反覆對句の用法の多いことである。菜を表はすに「甘菜辛菜」、青海原に住

む物は「鱧の廣物鱧の狹物、奥津藻菜邊津藻菜」、山を「高山の末短山の末」と、或は「明妙照妙和妙荒妙」と重ねて織物一般を表はすのは一種の修辭法には違ひないが、「朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く」と辭句をおしすゝめて行く大祓祝詞は莊重には違ひないが、之等は種概念を以て類概念に代へそれを盡くさうとする考へ方に基づくものである。世界の總體を以て神の全體の出現を待つのであるが、菜を表現するに甘菜辛菜を以てする様に同一類概念の中の對立せる種概念を以て一つの総合的な全體を表現する對句法は對立的な同位の種概念を以て類全體とする統一的精神のあらはれである。反覆をいとはぬのも之亦類全體をつくすにある。従つて種概念が類概念の下位概念ではなく種と類とは對位なのである。祝詞はこの異つた前論理的表現を以て、宇宙の全存在を以て、神を祈つたのである。神を祈り存全を更によく更に確固たる仕方に置き變へる祝詞はかくして人間生活の經驗に先立つものとしての神の言語の發動に浴する祭の庭に於て天の壁立つ極み國の退き立つ限り天涯地にわたつて此の綜合的精神を宣布する。

こゝに若し神言に逆らひ神意に反する人の行爲があるならばそれは言擧げに外ならぬ。草木が言語することも古代人にとつてはことごとく強暴として迫つたのである。人のさかしらなる言語を中絶し「語問ひし磐根樹立草の片葉をも語止め」ねばならぬのは、(大祓祝詞等)既に述べた如く「言」によつて彼等の領する「事」の歸屬を撤去せんとするにあるが、又一つにはさかしらなる言語をさしはさむ言擧げ

を中絶せしむるにある。天照大神の「瑞穂國」の御神勅も伊弉諾尊が日本は「浦安國」と申されたのもそれらが異なる神話群に發生したとする詮議はしばらく別として何れも國家生活の保證である。その限りそれ等を記述する古事記、日本書紀は神典である。農業政策に於て瑞穂國の神言に對しいさゝかでも言擧げがあるならば、海軍問題で浦安國でない如き事實に立ち到らしめる様な言擧げがあるならば、總じて國土の生活が動搖しその歸するところを知らざる時が來るならば何よりも先づ神語をのらねばならぬ。行爲主體としての神語がのられる時人の行爲は一定の方向に秩序附けられる。祭政一致とは蓋しこのことを言ふに外ならない。神意に反せざる様のられる言語はさかしらなる言擧げでなくて直ちに自己の生き方を決定した。その點に於てそれは生々とした生命力であつた。現存の高度に發達した宗教から神話的敘述を除き得ない理由の一半は、而して宗教にしばしば神話がその一要素をなすことの理由の一半は以上によつて大略明かになると思ふ。

をろかなる言擧げをせざる限りわれわれの歴史は此の國土の存在に先行して存在してゐたことがうけがはれる。民族によつては先行した歴史世界を地下に或は浪の穂の彼方に想定するものもあるが、高天原は神の常在の國であるばかりでなく我々の歴史に對し神語の發動する規範的世界である。これをこそ根源的歴史と考へるに不足があるだらうか。國土に先行して歴史が存在したことを否む人はやがて古代史を拒む結果になるだらう。わが國の歴史が今のわれわれを以てのみ構成されてゐるとなす

のは古代人にとつては實に言ふもをろかしきさかしらであつた。歴史はすでに在つた。こゝに古代の神話的歴史觀の確固たる成立がある。後の世に歴史は「かゞみ」と稱せられたが、か様な語の成立に至るまでにすでに古く以上の規範的世界の存在を肯定した神話的思考の先驅があつたことを思はねばならぬ。日本書紀が神代を別立させたのは規範的世界に對する考へ方を表はす特別な歴史意識から來てゐるのである。そしてまた神代の言語が一回的<sup>◎</sup>に移り行く人間の世界に初めて國家的<sup>◎</sup>に實現されし神武天皇に國史の始元を置き奉ることは即ち日本紀元の立て方の恣意によるものに非ざることを明白に示す。

#### 四

神の言語を知ることが人の勝れた行爲であるが、「知る」即ち認識するといふことは古代人にとつては知行合一とか學問の實踐とか淺ましくも叫ばれねばならぬ程認識と行爲とが離脱してゐなかつた。さてシルとは如何なる行爲であるか。安藤氏は知る、敷く、占むはシと語根とする R・K・M による語の分化であると指摘してをられるが、 $\begin{matrix} \text{R} \\ \text{K} \\ \text{M} \end{matrix}$  (知) (敷) (占) (古代國語の研究二九〇頁) 日本語シルの意味はその根源にあつては「自分のものとする」との意味を含めてをる。天下を治めることをシラすと云ふのも同様である。であるから神を知るのは智識の上でのみ神の實在を認知する即ち神を對象<sup>◎</sup>として成り立つ認識<sup>◎</sup>にとゞまるのでなくて神を領<sup>し</sup>る行爲をはらむでゐた。神を領る行爲とは即ち神が儀禮によつて初めて

知られることである。祝詞をのることによつて神の顯現を促すのであるが故にそれは神をシル言語儀禮に外ならぬ。

神を知ることにより神の言語がその存在を疑はれ拒まれることなく優越的に人の行爲の主體となり生活に遍滿し得たのである。言擧げはであるから知識によつてのみ存在を裁かうとする神意に反する淺ましき人の行爲である。われわれの認識は行爲に於て缺ける事なき十全の認識であらねばならぬことを思ふと共に神國の意識は古事記、日本書紀を神典として仰ぐものである。

註① R. B. Dixon, *Oceanic* (The Mythology of All Races, Vol. IX), P. 4.

② R. B. Dixon, *Op. Cit.*, P. 11.

③ R. B. Dixon, *Op. Cit.*, P. 13.

④ R. B. Dixon, *Op. Cit.*, P. 105.

⑤ E. Cassirer, *Sprache und Mythos* P. 38.

⑥ B. Malinowski, *Myth in Primitive Psychology* P. 36, 124.

⑦ L. Lévy-Bruhl, *La Mentalité Primitive*, P. 231-232.

⑧ E. Durkheim, *Les Formes Élémentaires de La Vie Religieuse*, p. 190.

⑨ J. G. Frazer, *The Golden Bough* (Abridged Edition), P. 244-247.

⑩ E. Cassirer, *Die Begriffsform in mythischen Denken*, P. 20, 42.